

国連のグテレス事務総長が「地球温暖化の時代は終わり、地球沸騰化の時代が到来した」と警告する発言があった。テレビでは毎日、強烈な熱波、大雨による洪水、干ばつ、竜巻による被害、世界の各地で起こっている収拾のつかない山火事、海水の異常な高温、そして、氷河の融解などが放映されている。地球は熱波に見舞われ、グテレス氏の警告通り、異常気象になっていることを知らされている。岩波の月刊誌『世界』に、東京大学未来ビジョン研究センター教授の高村ゆかり氏の「気候再生のために」というタイトルの連載がある。9月号第16回を読んで、恐怖を感じた。まず、高村氏の報告を紹介したい。

2023年7月7日の世界平均気温は17.24℃で史上最高だった。この世界平均気温については、高くなっていることは想像できるが、実感がない。最高気温は、スペインのカタルーゲレスでは45.4℃、マラガでは44.2℃、フランスのカンヌでは39.1℃、イタリアのシシリア島では46.3℃を記録した。米国のデスヴァレーでは53.3℃を記録し、真夜中の気温が48.9℃だった。アリゾナ州のフェニックスでは43.3℃を超えた。中国の、新疆ウイグル自治区では52.2℃を記録した。日本で、今年初めて40℃を超えたというニュースがあった。50℃を超える気候など、想像もつかないが、事実として、このような気温になっている訳である。我が団地も、クーラーを入れないと、すぐに30℃を超えるようになる。気温上昇は世界規模で起こっていることは確かである。

ギリシアの森林で、少なくとも46ヶ所で火災が発生し、拡大している。スペインのラ・パウマ島では約4500ヘクタールが焼失した。ポルトガルやクロアチアでも森林被害が広がっている。カナダでは900万ヘクタールの森林が火災によって焼失した。

インドや南アジアでは記録的な大雨が降り、洪水による死者などの被害が生じている。インドのデリーでは、一日の雨量が153ミリ、7月の一日の雨量としては最高の降雨量を記録した。日本でも、福岡県添田町では線状降水帯が発生し、24時間の降水量が423ミリに達した。床上、床下浸水の被害は3700棟、土石流による被害も500棟と推計されている。

海水温もかつてない高い水準を記録した。漁業資源や海洋循環にも影響を与え、気候に連鎖的な影響を及ぼす。海面水温を上げるエルニーニョ現象は2024年にも続くという。

米国、キューバを襲ったハリケーン、欧州、米国の干ばつは大きな経済的損失をもたらし、欧州の熱波による死者数は1万9千人を超え、別の研究論文では6万人の命が失われたと評価している。日本でも、7月だけで5万4千人が熱中症に罹り133人が亡くなった。

気候変動、異常気象は健康被害や死亡に至り、影響は拡大する。世界保健機構（WHO）の2014年の予測では、暑熱で、65歳以上の人々のうち、2030年には3万8千人が、2050年には10万人近くの人々が命を失う恐れがあると報告している。暑熱による死亡者の56%が女性で、80歳以上の高齢者が半数以上を占める。水不足、熱波や砂漠化に晒される人口は1.5℃の気温上昇で9.5億人、2℃の上昇で11.5億人、3℃の上昇で12.9億人に増える。主要作物については、1.5℃の気温上昇で630億米ドル、2℃の上昇で800億米ドル、3℃の上昇で1280億米ドルを損失する見通しだそうである。

地球沸騰化による異常気象は、人間の経済的発展と利便性を求めての結末であることに異議を唱える人はいないだろう。人類の滅亡までいつてしまうのか。まだ、間に合うと信じたい。戦争なんかしている時ではない。対立を煽って、軍拡などしている時ではない。世界の人々が徒な経済成長の夢を捨て、地球沸騰化に歯止めをかけるべきである。